

実践研究（５）「わたしの日本語」の振り返り  
—動的なことばをとらえ、学習者目線に立つ授業実践—

1. はじめに

「実践研究（５）」のテーマは『状況』のなかで言語とコミュニケーションを考える日本語教育実践である。この授業を履修した理由は、文型重視の日本語学校と、タスク重視の日本語学校の２校での経験による混乱を解消し、日本語教育の教室実践をとらえ直したいと考えたからであった。担当教員である小林ミナ先生の下、日本語教育研究センターで開講される「わたしのほんご」プロジェクト1-2（以下、「わたにほ」）において、「たまご先生」と呼ばれる大学院生が授業実践を行う科目である。今学期は私を含む３名が履修した。全15回の「わたにほ」のうち、12回分を履修生３名が４回ずつ分担して活動デザインを担当した。前半は「話す」、後半は「打つ」が活動のメインである。履修生は其中でさらに決められたテーマに沿って活動内容を考えた。

本レポートでは、今学期「実践研究（５）」を通じて得た学びを、履修時に立てた目標３点から振り返ることを目的とする。また、振り返りを通じて今後の実践にどのように活かしていくかを考えたい。

2. 目標ごとの振り返り

今期の立てた３点の目標と、担当した４回分の授業の概要は下の通りである。

3つの目標

- |  |
|--|
| (1) 「文型」や「表現（機能）」から出発するのではなく、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を理解し、実現する。 |
| (2) 1人ひとりの学習者にとって「+1」になる活動を組み立て、実践する。                                |
| (3) 学習者の「主体性」を引き出すオンライン活動を組み立て、実践する。                                 |

担当した授業の目標と内容

Lesson 4 話す活動「私の好きな○○」
① 好きな「こと」や「もの」について、友達に伝えることができる
② 友達の好きな「こと」や「もの」を聞いて、共通点を見つける
③ 「好き」を表す語彙や表現を増やす
事前に各自提出したスライドをもとに、4~5人のグループで「私の好きな○○」について話し、共通点をまとめる。先生は各部屋を回り、活動を見守る。
Lesson 8 話す活動 復習「私の辞書づくり」
① ここまで学習した表現を振り返る
② 場面（いつ、どこで、だれと）を考えて会話がつくれる

③ほかの学習者と協働で課題が完成できる
事前に提出した3つの言葉・表現を辞書にする。2～3人のグループで提出された言葉の意味を確認し、相手と状況を設定して、会話例を考える。
Lesson 10 打つ活動 「SNSにコメントする」
①コメントに役立つ表現を覚える（感情表現や終助詞？）
②「打つ」特有の文字・記号が使える（～！w♡…）
③失礼な言葉づかいにならないことを意識できる
学生が提出した写真をSNSの投稿に見立てコメントをする。3～4人のグループに分かれて行い、各グループに先生1名が入り、打つ表現を一緒に検討する。
Lesson 13 打つ活動 「メールを切り上げる」
①メールを切り上げる表現を増やす
②メールの署名を完成させ、Gmailに登録する
③相手に応じて①②の使い分けができる
メールを切り上げる「よろしくお願いします」のバリエーションを増やす。また、出す相手に応じたメールの署名を考える。各グループに先生1名が入る。

\* 「先生」は、教授、TA 1名、「たまご先生」である大学院生3名をまとめて指す。

## 2-1. 目標1の振り返り

**目標（1）「文型」や「表現（機能）」から出発するのではなく、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を理解し、実現する。**

目標（1）は、まず「状況の中で言語とコミュニケーションをとらえる」ということを理解し、それから、実践に落とし込む必要があった。「状況」と聞くと、場面シラバスやロールプレイのような「設定」が思い浮かぶ。しかし、小林先生は、実際にある場面や状況になったとき、学生はロールプレイで想定される行動とは、まったく異なる行動をとる可能性を指摘する。では、実践でどのように「状況」を設定すればいいのだろうか。その前に「状況」とは何だろうか。

そのヒントになったのは、1回目の「自己紹介」で扱われた、「～から来ました」以外の出身を表す言い方だった。初級の自己紹介といえば、「～から来ました」が定番である。しかし、小林先生は、「～から来ました」は出身を表す言葉ではないと言う。これには軽い衝撃を覚えた。私自身も教科書通りに「私は東京から来ました」と名乗ることに違和感があったが、日本語教師である以上は私が変わらなければならないと思っていたからである。私は東京から来たのではなく、ずっと東京にいる。今期の「わたにほ」はオンライン開催で、来日した留学生、海外にいる留学生、日本や海外出身の大学院生が集まる。まだ来日していない学生が「私は中国から来ました」と言うと、「じゃあ今はどこに？」と思わず聞き返したくなる。そこで、ほかに出身を表す表現として、「出身は～です」などが提示された。私た

ちがオンラインで一つの場集まり、初めて話すこと自体が、すでに自己紹介の自然な「状況」だ。特定の表現を引き出すために何かの「状況」を設定しなくても、クラスの学生の状況や関係性を最大限に生かせばいいのではないかと、思うようになった。

では、目標（1）を実践ではどのようにとらえたか、授業設計から振り返りたい。1回目（Lesson 4「わたしの好きな○○」）では、学生が事前に提出したスライドに沿ってお互いの「好きな○○」について話したり、質問したりすることを通して、共通点を見つけるという活動のゴールを決めた。活動は思い通りにはいかなかったが、「共通点を見つける」というゴールを設けることによって、「好きな○○についてやり取りする」という状況を設定することを試みた。そして、言語的な支援には、教師、TA、大学院生3名の5人の「先生」が各部屋を回り、質問を受けながら対応できると考えた。今振り返ると、「共通点を見つける」というゴールが曖昧だった。ゴールがなくても、好きなことについてやり取りすること自体が、一つの状況であり、活動になったのではないかと思う。そして、先生は各部屋を回るのではなく、一つの部屋に見守り役として存在することで、その場その状況に沿って学生が言いたいことをよりの確に表現するための言語的な支援ができたはずだ。Lesson 4の振り返りには、次のように書いた。

各ルームでの活動を見回り、ファシリテーターの役割の大きさを実感した。ファシリテーターによって「言いたいことが引き出される」「他者の発言から気づく」「言いたいことが形になる」に学びがあるのではないかと、思った。次は「引き出す」「気づく」「形にする」といったステップを活動に入れてみたい。

学生だけでは見落としになってしまう言葉の使用に気づき、支援ができることにファシリテーター（先生）の役割が大きいと気がついた。そうした考え方で授業設計に近づいてきたのは3回目（Lesson 10「SNSにコメントする」）である。それまでは活動をゴールとして位置付けてしまっていたが、この頃から活動を話し合いの場として位置付けられるようになり、アウトプットした言葉について話したり考えたりすることが大切だと思うようになってきた。そのため先生もひとつの部屋で進行を見守り、必要に応じて学生一人ひとりの状況に沿った言語の支援を行う役割として位置付けた。

目標（1）について、前半では「状況とゴールを作り、そこで使われる言語を予想する」という考え方だった。何か新しい表現を与えることが質の良いインプットだと思っていた。しかし、プレタスクや活動を通して、学生がすでに自分の世界について語るができることと分かり、考え改めざるを得なかった。後半では「言葉を状況に応じて選択できるように支援する」という考え方に代わってきた。アウトプットされた言葉も以前は「意図を汲む」ことを重視していたが、より表現を意識するようになり、「状況に応じて言語とコミュニケーションをとらえる教育実践」がわかってきた。的確なフィードバックは今後の課題である。

2-2. 目標2の振り返り

目標(2) 1人ひとりの学習者にとって「+1」になる活動を組み立て、実践する。

目標(2)についてもまずは授業設計の観点から振り返りたい。第1回目のLesson 4の振り返りを見ると次のように書いていた。

プレタスクがよく書けていたため、『好きを表す語彙や表現』を学習者はすでにもっているのではないか、という迷いが生じた。このため何をもって活動が『うまくいった』と言えるのかに迷いをもったまま授業に臨むことになった。」

Lesson 4の活動案を見ると、「好き」を表す表現として形容詞などの表現を想定しており、それを「+1」のインプットとして明示したいと思っていた。学生が知らない役立つ表現を教えて使ってもらいたかった。にもかかわらず、プレタスクからはすでに学生の「好き」がよく伝わり、また、内容も人によって異なることから、「+1」を設定できなかった。

ヒントになったのは、別の履修生が担当したLesson 5「挨拶をする、返事をする」だった。授業担当の履修生が独自に集めた若者の挨拶の言葉は「はにゃ」「ワッサー」など聞いたこともなければ使ったこともない。私は今後一生使うことがなさそうであるし、多くの留学生もおそらく「わたしの日本語」としては使わないのではないかと思われた。これについて、小林先生から、「日本人でもみんなが使うわけではないということを、学生と話してもいい」というアドバイスがあった。Lesson 5のブレイクアウトルームの活動では、若者言葉の挨拶の一覧表を見ながら、次のようなやりとりがあった。A~Dはそれぞれ学生である。

A:「おつ」はいつ使いますか。

私:「おつ」はどこからきた言葉だと思いますか。

A、B、C: ?

D:「おつかれさまです」だと思います。

A、B、C:「ああ」「よく分かりました」

→「お疲れ様です」「お疲れ」「おつ」の丁寧さ、使う場面を確認。

ここから私が学んだことは、「+1」は一方向的に与えることよりも、気づくことから生まれるのではないか、ということだ。無理に与えるのではなく、共有している素材をもとに話し合い、気づきにつながれば、「+1」の活動になるのではないかと思うようになった。

「+1になる活動」の実践は難しく、「言語の+1」のみに意識が向く。まず、「言語の+1」として、Lesson 5で体感した「生きた言葉を扱う」ということを試したのは、実践3回目のLesson 10「SNSにコメントする」だった。ひとことコメントできるようになることを目標に、SNSの表現を集めてインプット素材として提示した。例えば「♡」「~」「笑、(笑)、

w) や、猫語「ニャン」や犬語「ワン」である。提示の仕方はもっと工夫が必要だったと思うが、各部屋に先生が入ってインプットの不足を補い、学生が「面白いな草」「あおっ！」「可愛すぎる。。。」「といった SNS らしい表現を試す様子が見られた。

学生の気づきを促す「+1」を意識できたのは、実践4回目の Lesson 13「メールを切り上げる」である。私自身は「どうぞよろしく願いいたします。」という万能的な切り札をいつも使っている。これだけならひとこと伝えれば学生も十分理解できるだろう。これがどのようにすれば「+1」になるかが私の課題だった。それまでは活動内容やインプット内容に意識が向いていた。しかし、ここでは特定の表現を知識として与えるインプットでは、学生がすでに知っていることの再確認で終わってしまうのではないかと感じた。そこで、実践研究(5)の講義で挙げた『「よろしく願いいたします」のバリエーションを増やす』という言葉がヒントになった。私は日ごろ、様々な「よろしく」を使い分けている。そこで、「よろしく」の便利さや、「よろしく」を使ってメールを効果的に終わらせる方法を示したいと考え、プレタスクを活用して「よろしく願いいたします」に焦点を当てた。ここでは、「よろしく」にも実は様々なバリエーションがあり、状況によって使い分けが必要となるということが「+1」として提示で来たのではないかと思う。

目標(2)で意識したことは「+1のインプット」だった。初めは新しい、固定的な表現のインプットだったが、次第にインプット素材をもとに「わたしの+1」が生まれることへと意識が変わった。

### 2-3. 目標3の振り返り

#### 目標(3) 学習者の「主体性」を引き出すオンライン活動を組み立て、実践する。

目標(3)は、学期の初めに自分で立てた「私の目標」である。補足として、「学習者が活動テーマそのものについて能動的に考え、よく話し、言葉に限らず何か気づきが得られること」だと書いていた。さらに「一つの実践について先生やTA、受講生同士でよく話し合い、どう『主体性』を引き出せるかを検討して考えたい。さらに、オンラインだからこそできることを考えてみたいと思う」とも書いていた。この目標を立てたのは、これまでの実践経験への反省からである。

意識できた点は、「オンライン活動」である。これまでオンライン授業で思い浮かぶ活動はZoomのブレイクアウトルームで話し合うことぐらいだった。しかし、他の履修生の活動案や、小林先生、TAの意見や提案に触れて、Google SlideやSpreadsheetによってオンラインで「ワークシートを共有する」という方法が活用できるようになり、学生の動きが視覚的に見えるようになった。ほかにもPadletなどのアプリを活用する方法や、言葉について学生とYouTubeで確認する方法など、学習リソースの幅の広がりを実感できた。特に後半の「打つ」活動ではオンラインのメリットが出たのではないかと思う。

一方、「主体性」は振り返りが難しい。先生から「主体性は主観的なものなので、振り返

るなら定性的に変わる瞬間を記録する」とコメントをいただいたが、「変わる瞬間」の記録はできなかった。ここで Lesson 8「復習・私の辞書作り」について振り返っておきたい。なぜなら、実は「主体性」が全く意識できていないと気づくことになったからだ。というのも、学生 18 人がプレタスクで提出した合計 54 の言葉について、私が注目したのは「どのような言葉が集まったか」ということだけだった。つまり、「誰が、どの 3 つの言葉を選んだのか、それはなぜか」といった「人」には全く目が向いていなかったのだ。そのことを小林先生に指摘され、初めて私が言葉を「脱文脈化」している現実に気づいて愕然とした。この授業全体のなかで、学生と言葉への向き合い方が変わったのはここからである。

目標（3）について、オンライン活動は形になったが、「主体性」が引き出されたかは評価が難しい。学生が「主体性」を発揮した場面はあるが、意図的に授業設計に取り込めたわけではなかった。もし目標を立てなおすなら、「学習者目線に立った授業を実践する」としたい。この点については、この後もう少し振り返りたい。

#### 2-4. 学習者目線に立った授業づくり

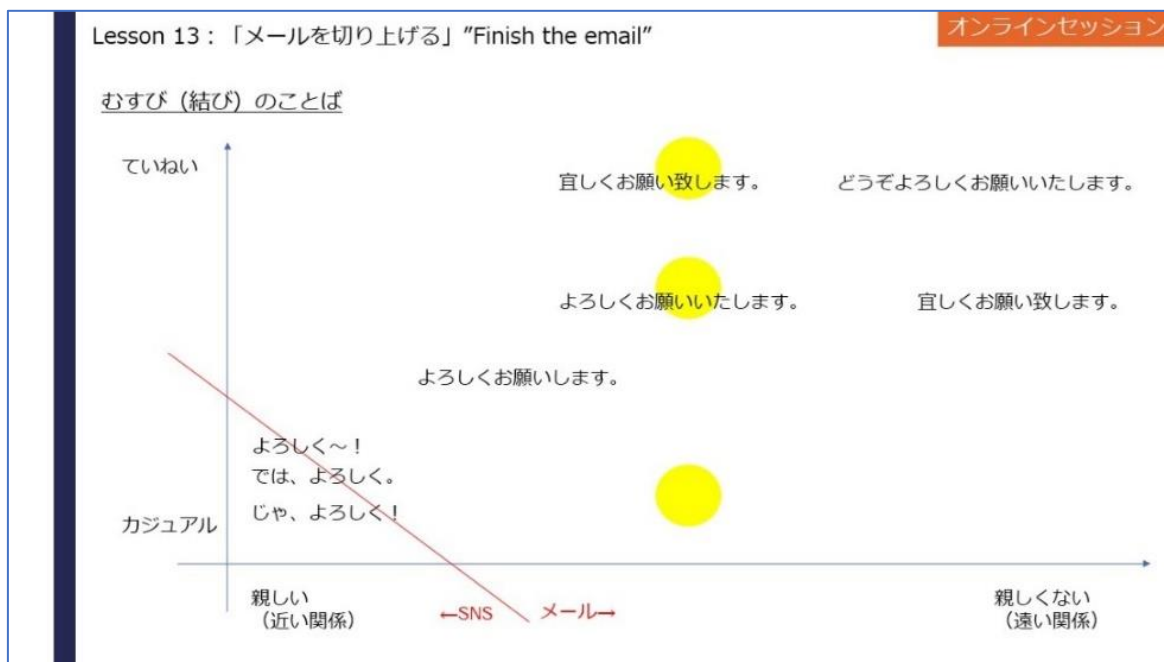
履修全体を通じて、今期の学びの中でも特に大きかったのが「学習者目線」という視点である。大切さはわかるが、いざ実践となると難しい。「たまご先生」として行う授業用のスライドを準備すると、そこには伝えたい内容が凝縮される。それをもとにリハーサルを行うと、次第にひとりで話し続けている感覚になり、はっとする。ある言葉について説明する言葉を「メタ言語」というようだが、その「メタ言語」が多い。また、説明やスライドが整理されていないときには、「学習者が先生の頭の中を追いかける授業になっている」と小林先生から指摘を受ける。そうではなく、「先生が学習者の頭の動きに合わせる」ことが大切である。どうすればいいか。

その方法について学んだことのひとつに、「視覚的に伝える」ことがある。Lesson 13「メールを切り上げる」で実際に意識して試してみた。具体的には「よろしくお願ひします」をマッピングした。しかし、私の理解が曖昧だったことがそのままスライドに現れていた。

そこで、授業前のリハーサルで小林先生に指導を受けながら、再編成したものが次のページの図である。横軸は「関係性」で、これは相手が同じなら、左右に変わることはない。しかし、縦軸の「ていねいさ」は、相手が同じでもメールの内容や状況によって変わることがある。また、「親しい」相手に「カジュアル」な内容の連絡をする場合には、メールよりも LINE 等の SNS が使われる。こうしたことを視覚的に整理できたことで、私自身もよく理解ができた。理解できたことから、学生にもスモールステップで丁寧に説明ができた。

学習者目線に立った授業づくりは、伝える内容を理解し、整理することが必要だ。違和感をそのままにせず、腹に落ちるまで向き合っようやく「分かるように伝える」というステップに向かえる。それぞれ勉強と工夫が必要だ。

図：Lesson 13 「メールを切り上げる」 オンラインセッション用



### 3. おわりに

今回の実践研究(5)の経験は、これまで経験したどの外国語学習や日本語教育とも異なる経験で、とても多くの学びがあった。私たち「たまご先生」にとってはもちろん、学生にとっても少人数で日本語について話し合えるいい学習環境だったと思いたい。

履修前、文法には固定的なイメージをもっていた。文型積み上げ型への反動から、ことばをより自由に考えたいと、発話の内容のみに意識を傾けてきた。しかし、この授業の履修を通して、「ここでの文法は何か」ということを問われてきたことで、文法は生きたことばの中に現れてくるものだという感覚を持てるようになった。ここから、「表現が内容を表しているかどうか」ということへの意識がもてるようになってきた。ことばの中に現れる文法をとらえるには、もっと多くのことばに「まみれる」ことが必要で、まだ修行が足りない。今後も多くのことばと向き合い、学習者目線で伝えられることをめざしたい。

学生との向き合い方についても、「学習者を信頼する」「学習者を待つ」というアドバイスを何度もいただき、少しずつ感触が得られた。沈黙を恐れず、学生が思考を巡らせる時間を尊重できるようになってきた。また、学生の前で教師同士が話し合うという経験は、ことばを動的にとらえるいい機会となり、「教師として間違っはならない」という考え方も崩すことができた。

毎回、小林先生、TAの先輩、そして2人の履修生仲間と様々な意見交換ができて、多くの学びがあった。たくさんアドバイスを、実践のアイデアをいただいた。14回の実践が終わってみて、実現できなかったことや、うまくいかなかったこともいろいろと思いつかぶが、ここで学んだ考え方や課題を、これからも実践の場で生かしていきたい。